

## 【B年】聖霊降臨節第6主日(2022年7月10日)

## 【旧約聖書日課】エステル記4章10節～5章8節

4<sup>10</sup> エステルはまたモルデカイへの返事をハタクにゆだねた。<sup>11</sup> 「この国の役人と国民のだれもがよく知っているとおりに、王宮の内庭におられる王に、召し出されずに近づく者は、男であれ女であれ死刑に処せられる、と法律の一条に定められております。ただ、王が金の笏を差し伸べられる場合にのみ、その者は死を免れます。三十日このかた私にはお召しがなく、王のものには参つておりません。」<sup>12</sup> エステルの返事がモルデカイに伝えられると、<sup>13</sup> モルデカイは再びエステルに言い送った。「他のユダヤ人はどうであれ、自分は王宮にいて無事だと考えてはいけません。<sup>14</sup> この時にあたってあなたが口を閉ざしているなら、ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり、あなた自身と父の家は滅ぼされるにちがいない。この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。」<sup>15</sup> エステルはモルデカイに返事を送った。<sup>16</sup> 「早速、スサに在るすべてのユダヤ人を集め、私のために三日三晩断食し、飲食を一切断つてください。私も女官たちと共に、同じように断食いたします。このようにしてから、定めに反することではありますが、私は王のものに参ります。このために死ななければならないのですら、死ぬ覚悟しております。」

<sup>17</sup> そこでモルデカイは立ち去り、すべてエステルに頼まれたとおりにした。

5<sup>1</sup> それから三日目のことである。エステルは王妃の衣装を着け、王宮の内庭に入り、王宮に向かって立った。王は王宮の中で王宮の入り口に向かって王座に座っていた。<sup>2</sup> 王は庭に立っている王妃エステルを見て、満悦の面持ちで、手にした金の笏を差し伸べた。エステルは近づいてその笏の先に触れた。<sup>3</sup> 王は言った。「王妃エステル、どうしたのか。願いとあれば国の半分なりとも与えよう。」<sup>4</sup> エステルは答えた。「もし王のお心に適いますなら、今日私は酒宴を準備いたしますから、ハマンと一緒ににお出ましくください。」<sup>5</sup> 王は、「早速ハマンを来させなさい。エステルの望みどおりにしよう」と言い、王とどう酒を飲みながらエステルに言った。「何か望みがあるならかなえてあげる。願いとあれば国の半分なりとも与えよう。」

<sup>7</sup> 「私の望み、私の願いはと申しますと」とエステルは言った。<sup>8</sup> 「もし王のお心に適いますなら、もし特別な御配慮をいただき、私の望みをかなえ、願いをお聞き入れくださるのでございましたら、私は酒宴を準備いたしますから、どうぞハマンと一緒ににお出ましくください。明日、仰せのとおり私の願いを申し上げます。」

## 【使徒書日課】使徒言行録13章13～25節

<sup>13</sup> パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のベルゲに來たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。<sup>14</sup> パウロとバルナバはベルゲから進んで、ピンディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。<sup>15</sup> 律法と預言者の書が朗読された後、会堂長たちが人をよこして、「兄弟たち、何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言させた。<sup>16</sup> そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。

「イスラエルの人たち、ならびに神を畏れる方々、聞いてください。<sup>17</sup> この民イスラエルの神は、わたしたち

の先祖を選び出し、民がエジプトの地に住んでいる間に、これを強大なものとし、高く上げた御腕をもってそこから導き出してくださいました。<sup>18</sup> 神はおよそ四十年の間、荒れ野で彼らの行いを耐え忍び、<sup>19</sup> カナンの地では七つの民族を滅ぼし、その土地を彼らに相続させてくださったのです。<sup>20</sup> これは、約四百五十年にわたることでした。その後、神は預言者サムエルの時代まで、裁く者たちを任命なさいました。<sup>21</sup> 後に人々が王を求めたので、神は四十年の間、ベニヤミン族の者で、キシユの子サウルをお与えになり、<sup>22</sup> それからまた、サウルを退けてダビデを王の位につけ、彼について次のように宣言なさいました。『わたしは、エッサイの子でわたしの心に適う者、ダビデを見いだした。彼はわたしの思うところをすべて行う。』<sup>23</sup> 神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。<sup>24</sup> ヨハネは、イエスがおいでになる前に、イスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。<sup>25</sup> その生涯を終えようとするとき、ヨハネはこう言いました。『わたしを何者だと思っているのか。わたしは、あなたたちが期待しているような者ではない。その方はわたしの後から來られるが、わたしはその足の履物をお脱がせする値打ちもない。』

## 【福音書日課】マルコによる福音書6章14～29節

<sup>14</sup> イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」<sup>15</sup> そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、「昔の預言者のような預言者だ」と言う人もいた。<sup>16</sup> ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。<sup>17</sup> 実は、ヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており、そのことで人をやってヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。<sup>18</sup> ヨハネが、「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。<sup>19</sup> そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。<sup>20</sup> なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。<sup>21</sup> ところが、良い機会が訪れた。ヘロデが、自分の誕生日の祝いに高官や將校、ガリラヤの有力者などを招いて宴会を催すと、<sup>22</sup> ヘロディアの娘が入って来て踊りをおどり、ヘロデとその客を喜ばせた。そこで、王は少女に、「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」と言い、<sup>23</sup> 更に、「お前が願うなら、この国の半分でもやろう」と固く誓ったのである。<sup>24</sup> 少女が座を外して、母親に、「何を願いまししょうか」と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。<sup>25</sup> 早速、少女は大急ぎで王のところに行き、「今すぐには洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。<sup>26</sup> 王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、少女の願いを退けたくなかった。<sup>27</sup> そこで、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って來るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、<sup>28</sup> 盆に載せて持って來て少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。<sup>29</sup> ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、やって來て、遺体を引き取り、墓に納めた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## エステル記4章10節～5章8節

4<sup>10</sup>エステルはハタクと語り、モルデカイに次のように伝えるよう命じた。<sup>11</sup>「王の家臣と王の諸州の民が皆知っているとおり、呼ばれないのに内庭に入って王のもとへ行く者は、男であれ女であれ、殺されなければならないという一つの法があります。ただ、王が金の笏を差し伸べた者だけが死を免れます。私はこの三十日間、王のもとに行くよう呼ばれておりません。」<sup>12</sup>エステルの言葉がモルデカイに伝えられた。<sup>13</sup>モルデカイはエステルに返答して言った。「あなたは、その他のユダヤ人とは異なり、王宮にいる自分は難を免れるだろうと思っはならない。<sup>14</sup>もし、この時にあなたが黙っているならば、ユダヤ人への解放と救済が他の所から起こり、あなたとあなたの父の家は滅びるであろう。このような時のためにこそ、あなたは王妃の位に達したのではないか。」<sup>15</sup>エステルはモルデカイに返答して言った。<sup>16</sup>「あなたは行って、スサに在るすべてのユダヤ人を集め、私のために断食してください。三日の間、夜も昼も、食べても飲んでいけません。私も私の侍女たちもと、同じように断食します。このようにしてから、法に背くことですが、私は王のもとに行きます。もし死ななければならないのであれば、死ぬ覚悟しております。」<sup>17</sup>モルデカイは出かけて行って、すべてエステルが彼に命じたとおりに行った。

5<sup>1</sup>それから三日目に、エステルは王妃の衣装を着け、王宮の内庭に入り、王宮に向かって立った。王は王宮の中で建物の入り口に向かって王座に座っていた。<sup>2</sup>王が庭に立っている王妃エステルを見たとき、彼女は王の好意を得た。王はエステルに、手にした金の笏を差し伸べた。エステルは近づいてその笏の頭に触れた。<sup>3</sup>王は彼女に言った。「王妃エステルよ、どうしたのか。あなたが願うのであれば、国の半分なりともあなたに与えよう。」<sup>4</sup>エステルは言った。「もし王様が良しとされるならば、今日私が王様のために催す酒宴に、ハマンと一緒に出席してください。」<sup>5</sup>王は言った。「急いでハマンを来させよ。エステルの言葉のとおりにしよう。」王とハマンはエステルが催す酒宴に来た。<sup>6</sup>王はぶどう酒を飲みながらエステルに言った。「あなたが望むことは何でもかなえよう。あなたが願うのであれば、国の半分なりとも与えよう。」<sup>7</sup>エステルは答えた。「私の望み、私の願いはこれです。<sup>8</sup>もし私が王様の好意を得、望みをかなえ、願いを聞き入れていただけるのでしたら、私が王様とハマンのために催す酒宴に、ハマンと一緒に出席してください。明日、私は王様の言葉とおりにいたしますよう。」

## 使徒言行録13章13～25節

<sup>13</sup>パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のベルゲに来たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。<sup>14</sup>パウロとバルナバはベルゲから進んで、ピンディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。<sup>15</sup>律法と預言者の書が朗読された後、会堂長たちが人をよこして、「兄弟たち、何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言わせた。<sup>16</sup>そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。

「イスラエルの人たち、ならびに神を畏れる方々、聞いてください。<sup>17</sup>イスラエルの民の神は、私たちの先祖を選び出し、民がエジプトの地に寄留している間に、これを強大なものとし、高く上げた御腕をもってそこから導き出してくださいました。<sup>18</sup>神はおよそ四十年の間、荒野で彼らの行いを耐え忍び、<sup>19</sup>カナン之地では七つの民族を滅ぼし、その土地を彼らに相続させてくださったのです。<sup>20</sup>これは、約四百五十年にわたることでした。その後、神は預言者サムエルの時代まで、士師たちを任命なさいました。<sup>21</sup>後に人々が王を求めたので、神は四十年の間、ベニヤミン族の者で、キシユの子サウルをお与えになりました。<sup>22</sup>それから、サウルを退けてダビデを王の位に就け、彼について次のように宣言なさいました。『私はエッサイの子ダビデを見いだした。彼は私の心に適う者で、私の思うところをすべて行う。』<sup>23</sup>神は約束に従って、このダビデの子孫から、イスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。<sup>24</sup>ヨハネは、イエスが来られる前に、イスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。<sup>25</sup>その生涯を終えようとするとき、ヨハネはこう言いました。『私を何者だと思っているのか。私はその方ではない。その方は私の後から来られるが、私はその足の履物をお脱がせする値打ちもない。』

## マルコによる福音書6章14～29節

<sup>14</sup>イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は、「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、あのような力が彼に働いている」と言っていた。<sup>15</sup>他の人々は「彼はエリヤだ」と言い、またほかの人々は「昔の預言者の一人のようだ」と言っていた。<sup>16</sup>ヘロデはこれを知り、「私が首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。<sup>17</sup>実は、ヘロデは、兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており、そのことで人をやってヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。<sup>18</sup>ヨハネがヘロデに、「兄弟の妻をめとることは許されない」と言っていたからである。<sup>19</sup>そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。<sup>20</sup>なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。<sup>21</sup>ところが、良い機会が訪れた。ヘロデが、自分の誕生日に重臣や将校、ガリラヤの有力者たちを招き、宴会を催すと、<sup>22</sup>ヘロディアの娘が入って来て踊りを踊り、ヘロデとその客を喜ばせた。そこで、王は少女に、「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」と言った。<sup>23</sup>さらに、「お前が願うなら、私の国の半分でもやろう」と固く誓ったのである。<sup>24</sup>そこで、少女は座を外して、母親に、「何を願いますか」と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。<sup>25</sup>早速、少女は大急ぎで王のところに戻り、「今すぐに、洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。<sup>26</sup>王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また列席者の手前、少女の願いを退けたくなかった。<sup>27</sup>そこで、王はすぐに衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るように命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、<sup>28</sup>盆に載せて持って来て少女に与え、少女はそれを母親に渡した。<sup>29</sup>ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めた。

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・7月10日「聖霊降臨節第6主日」の日課主題は「神の計画」。旧新約聖書は、イスラエル、イエス、教会の各時代における「神の民の物語」として構成されており、人(=民)が神の御心に従って生きる上で、「神の計画」に基づいた使命が託されていることを自覚して生きることの意義を物語る。聖霊降臨から始まる「使徒たちの教会」は、信仰の先達の物語を聴き直すことを通して、自らに託された神からの使命を自覚し、キリストに従って生きる道を歩むよう促されている。

・旧約聖書日課は、「エステル記」から、ペルシアの王妃エステルが、自らの出身民族であるユダヤ人絶滅計画を阻止すべく、危険を冒して王に陰謀の事実を進言する計画を進める場面の一部。使徒書日課は、「使徒言行録」から、バルナバ宣教団の一員としてピシディア州アンティオキアの会堂で語るパウロが、旧約の信仰者の物語から説き明かして、主イエスの先駆者とされる洗礼者ヨハネについて言及する箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、ガリラヤ領主ヘロデに捕えられていた洗礼者ヨハネが、ヘロデの継子への褒美として斬首されたことを伝える箇所。

**旧約日課(エステル 4-5 章より)**

・「エステル記」は、ユダヤ正典「諸書(ケトウビーム)」の中で「五つの巻物(ハメシュ・ハ・メギロト)」と呼ばれるまとまり(「雅歌」「ルツ記」「哀歌」「コヘレトの言葉」「エステル記」)の最後に置かれる文書。これらの「巻物(メギロト)」は、ユダヤ教の五つの祭りに際して朗読される文書として位置づけられている(それぞれ順に、過越祭、七週祭、神殿崩壊記念日、仮庵祭、プリム祭)。「エステル記」は、プリム祭の起源譚としてまとめられた時代物語である(9章参照)。プリム祭の歴史的起源はペルシア支配下の世俗的祝祭にあるとされ、これを(他の祭り同様)神学的に位置づける意図をもって編纂されたものと考えられる。本書本文には、ペルシア語由来の外来語の使用が認められるが、ギリシア語由来の外来語は見られず、ペルシア支配時代(前539年～前330年頃)に編纂された証左と見る説もあるが、ギリシア(セレウコス朝シリア)支配時代に反ギリシア的立場で編纂されたともみることできる。実際、前2世紀にはセレウコス朝シリアがユダヤ人に対する激しい弾圧政策を取り、20年以上断続的に続いた独立戦争(マカバイ戦争＝前167年～142年頃)が起こっているが、ペルシア支配時代には、そのような事実は知られていない。

・物語の背景となっているクセルクセス王(在位＝前485年～前465年頃)の時代は、ペルシアが西方遠征によってギリシア攻略戦(ギリシア・ペルシア戦争＝前492年～前449年頃)を展開していた時代である。ペルシアは、すでに安定的な統治を成し遂げていたが、ギリシア攻略戦で激しい抵抗に遭うなど、局地的

には不安定要素を抱えていた。一方、被支配民であったユダヤ人は、一部がユダ・エルサレムに帰還し再建した神殿をセンターとした共同体社会を形成し始めていたが、バビロニア時代の捕囚地であるバビロン市にも相変わらず大きな居留民としての社会を維持し続け、ペルシアの王宮政治に深く関わる者たちも少なくなかったとされる(「エズラ・ネヘミヤ記」参照)。

・「王妃エステル」の物語の史実性は疑わしい。エステルが王妃に選ばれることになる前提として描かれるのが王妃ワシュティの退位の出来事であるが(1章)、歴史上のクセルクセス王の王妃として知られるアメストリス妃の退位を示唆する史料は知られていない。

**使徒書日課(使徒 13 章より)**

・「使徒言行録」については、前回までの資料を参照。日課箇所は、前主日聖書日課に続く箇所。「使徒言行録」は、前段まで「サウロ」として描いていた人物を、ここから「パウロ」として描いていく。前段中には、「パウロとも呼ばれていたサウロ」(13:9)と説明があった。これに伴って、前段まで「サウロ」に優先して名が挙げられていた「バルナバ」が、ここからは「パウロ」に続く人物として名を挙げられるようになる。「使徒言行録」は、ここに「パウロ物語」を始めようとしている。

・ピシディア州アンティオキアは、シリア州アンティオキアと同名の町。マケドニア・アレクサンドロス大王の没後(前323年没)、セレウコス朝シリアを創始したセレウコス・ニカトール王は、父アンティオコスを記念して建設した16の町に「アンティオキア」の名を付けたとされる。ピシディア州からアジア州にかけては、この時代、ユダヤ人が集住する町が少なくなかったとされる。

・16節「神を畏れる方々(フォボウメノイ)」は、異邦人でユダヤ会堂の安息日礼拝に出席している求道者を指す呼称。ローマ帝国では、カエサル以来、歴代皇帝がユダヤ人を保護する政策を取る一方、ディアスポラを中心とするユダヤ教社会も改宗者受け入れに積極的な立場を取ったため、多くの「神を畏れる者」を会堂に受け入れ、また「改宗者」として完全受け入れするということが続いた。パウロらの「異邦人伝道」のおもな対象となったのは、このようなユダヤ会堂に入りしている「神を畏れる者」と呼ばれる異邦人らであったと考えられる。彼らは「割礼と戒律遵守」というハードルを経ることなく、「洗礼」によって「神の民」に加えられる、というパウロの示す福音に応ずる動機が、十分にあったと考えられる。

・パウロが会堂で行ったとされる勧めは、族長時代から王国草創期までの時代の歴史を要約することから始められている。一方、ダビデ以降のイスラエル史はまったく触れられることなく、ダビデの子孫としての主イエスを語るところに繋げている。実際、このような歴史の概観は、初代教会で広く共有されていたと考えられる。洗礼者ヨハネについての叙述は、「福音書」と共通の伝承がそのまま充てられている。

**福音書日課(マルコ 6 章より)**

・日課箇所は、前主日聖書日課に続く箇所。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、「ルカ福音書」では、後半のヨハネ処刑に関する報告が「洗礼者ヨハネの紹介記事」(3 章)に付帯して語られている。

・日課箇所の文脈的位置づけは、ヨハネ処刑に関する報告よりも、主イエスの出現をヨハネの再来としてヘロデが恐れたという伝承を示すことにある。「マルコ」と「ルカ」は、これを、直前と「十二人の派遣」と結びつけて描いており、主イエスの活動が広がって名が知れ渡るようになったことを弟子たちの派遣による結果と見ているのである。

・主イエスが「ヨハネの生き返り」と噂されていたことが伝えられ、ヘロデ(ガリラヤ領主アンティパス)もそう信じていたと伝えられているが、実際にどうであったかは分からない。英雄の人物の「生き返り」や「乗り移り」の伝説は、当時はめずらしいことではなく、有名な話としてネロ帝の「生き返り」伝説等が知られる。

・一方、ヨハネ処刑に関する逸話は、当時のユダヤ人歴史家ヨセフも『ユダヤ古代誌』で伝えており、広く知られていた。もっとも、ヘロデによる処刑の決断が、宴会で踊りを披露した王妃ヘロディアの娘に対する褒美としてであったという逸話場面は、「エステル記」のパロディとして物語られていることが明らかであり、実際に起こったことを正確に伝えているとは限らない。実際、ヘロデ・アンティパスは、ローマ皇帝から「ガリラヤ領主」の地位を認められていただけの者であり、彼の領地を分割して他の者に相続させる権限は持ち合わせていなかった。ヘロデ王家は、ハスモン王朝(前 140 年～前 37 年)を継承する王朝としてユダヤ地域に支配権を獲得したが、ローマの皇帝一族ユリウス・クラウディウス家と親密な関係にあり、保守的なユダヤ人の間では不人気であった(ヘロデ王家最後の当主アグリッパ II 世は、ユダヤ戦争に際してローマ軍に援軍を派遣し、エルサレム神殿破壊にも加担している)。一方、バビロン捕囚後に成立したユダヤ教・ユダヤ人共同体においては、キュロス王によるバビロニア支配からの解放として始まったペルシア支配時代は、理想化された時代として認識されていたと考えられる。「エステル記」の物語を想起させるパロディによってヘロデ・アンティパスの逸話を物語ることによって、ヘロデ王家がいかに理想からかけ離れた支配者であるのかということを実際立たせて描いてみせているのであろう。

**来週の誕生日 (7 月 10 日～16 日)****主日礼拝の讃美歌から**

・21-1 番「主イエスよ、われらに」は、I 341 番の歌詞を原曲に戻し、編曲を変更。作詞者 F・ヴィルヘルム II 世はザクセン＝ワイマール公国の領主で音楽家。

作曲家不詳だが、チェコの宗教改革者フス(1369～1415 年)に遡るとも言われる。

・21-486 番「飢えている人と」は、1977 年、ドイツの牧師 F.K.バルトの作詞、カトリックの音楽家 P.ヤンセンの作曲で創作された讃美歌。

・21-516 番「主の招く声が」は、S.ウェスレーに影響を受けて教会音楽家となった 19 世紀英国人パリーのオラトリオ「ユディト」の中の曲で「讃美歌集」(1924 年版)に採用された旋律に、新しい歌詞を付けて歌うべくグリーンが 1981 年に作詞した。英語原詞は 4 節だが、日本語訳では 5 節に拡大してまとめている。

**21-1「主イエスよ、われらに」****Herr Jesu Christ, dich zu uns Wend**

1. Herr Jesu Christ! dich zu uns wend, / Dein' Heil'gen Geist du zu uns send: / Mit Hilf' und Gnad', er uns regier / Und uns den Weg zur Wahrheit führ.
2. Thu auf den Mund zum Lobe dein, / Bereit das Herz zur Andacht fein, / Den Glauben mehr, stärk den Verstand, / Daß uns dein Nam werd wohl bekannt.
3. Bis wir singen mit Gottes Heer: / Heilig, heilig ist Gott, der Herr, / Und schauen dich von Angesicht / In ew'ger Freud' und sel'gem Licht.
4. Ehr sei dem Vater und dem Sohn, / Dem heil'gen Geist in Einem Thron, / Der heiligen Dreieinigkeit / Sie Lob und Preis in Ewigkeit.

**21-486「飢えている人と」****Brich mit den Hungrigen dein Brot**

1. Brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus.
2. Such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied.
3. Teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort.
4. Sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot.
5. Sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel.

**21-516「主の招く声が」****How clear is our vocation, Lord**

1. How clear is our vocation, Lord, / when once we heed your call: / to live according to your word, / and daily learn, refreshed, restored, / that you are Lord of all, / and will not let us fall.
2. But if, forgetful, we should find / your yoke is hard to bear; / if worldly pressures fray the mind, / and love itself cannot unwind / its tangled skein of care: / our inward life repair.
3. We marvel how your saints become / in hindrances more sure; / whose joyful virtues put to shame / the casual way we wear your name, / and by our faults obscure / your power to cleanse and cure.
4. In what you give us, Lord, to do, / together or alone, / in old routines and ventures new, / may we not cease to look to you, / the cross you hung upon / all you endeavored done.